

知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【開催日時】平成24年8月8日（水）

13時30分～15時30分

【会場】浜松市雄踏文化センター

1 出席者

- ・ 発言者 浜松市中区・西区及び湖西市において様々な分野で活躍されている方
6名(男性3名、女性3名)
- ・ 傍聴者 141人

2 発言意見

	項 目	頁
発言者 1	まちづくりの取組	3
2	やらまいかミュージックフェスティバル	6
3	篠原地区の津波対策	12
4	佐鳴湖の環境対策	15
5	健康寿命を延ばす取組 海外での工業団地の造成	21
6	親子体験教室による子育て環境の充実 母親の知識、経験、ネットワーク等の活用	23
2	静岡文化芸術大学の活用	30
傍聴者 1	浜名湖に対する考え方 浜名湖花博10周年	31
2	津波対策と高台移転に係る土地利用規制	34

<知事挨拶>

皆様、こんにちは。

今日はお暑い中、湖西市の三上市長様、そして県議会の鈴木洋佑先生、岡本先生、藤田先生、また田口先生、田形先生お越しいただきまして、誠に恐縮でございます。今日はそのうちの何人かの方はサムライシャツをお召しいただきまして、誠に恐縮でございます。

今日この広聴会、広く聴く会でございますので、こちらの浜松の方々の代表の方々からしっかり御意見を賜り、そしてまたフロアーの方からも時間の許す限り御意見を賜って、それを県政に生かすと、それが目的です。もう既に20回開いております。そして35市町のうち、これで27の市町を回ってまいりました。

今日は移動知事室の1日目でございます。朝、まずこのサムライシャツをつくってくださっているキンパラさん、ここは磐田でございますけれども、そこに行きました。縫製しているのは、たった、この有名な遠州において今は1社になったそうです。もう風前の灯火になっているところに、遠州の織物でこのようなサムライというそういうコンセプトと扇子ですね。扇子を使えるようにと、扇子を使ってセンスを上げていこうということなんですが、そういう扇子が上手に入るデザインで、このサムライシャツが進化しております。まだでき上がったばかりということで、だんだん、だんだんと格好よくなってまいりますので、どうぞごひいきに。

これは人々が使わないと生産者の元気が出ませんので、そして織物業者も、これは小幅物の織機で織ったものだそうです。しかし本来これは洋服ですから、広幅のものの織機が必要なんです、そこからの供給も十分に間に合わなくなりつつあるということで、徐々に増えておりますけれども、向こうが、もう注文が来て注文が来て仕方がないと思うくらい来ないとこれは発展しませんので、生産を支えるためにはそれを使う、地元のものを使うということがとても大切です。

今日はこの浜松市中区と西区と湖西市でございますが、中区は私、静岡文化芸術大学に長くおりましたので、2年2カ月ほどおりましたので、よく知っております。この西区の方は非常に広いですね。雄踏も舞阪も庄内も篠原も入っているということで、今日は海岸線の方を見てまいりました。そして天竜川の流域のところ、それから馬込川のところ等を見まして、今はもう三次想定における防潮堤は整備し終わっています。

しかし、これが10メートルを超す津波が来る可能性があるということで、そのためにここをどれくらい、またどこの土地を利用してつくるか。景観に配慮して、いわば天空回廊

という長い丘ができる。命の山がずっと連なっている、そういう丘ができるような形で、浜松から静岡の方に向かうと右側には遠州灘が見えて、そして左手には緑の防風林があって緑と青、そして若干高いところがございますから、気持ちがいいので、天気のいいときには富士山が見えるというふうに、平時においては住民の人々が楽しんでいただけるような、昔からそういう丘があったかのごときのものをつくろうと。

そしてその土をどこから持ってくるか、浚渫する土地では到底足りませんので、阿蔵山から持ってこようと思っております。阿蔵山は土地の造成に失敗しておりますから、これは浜松市と仲良くして、あそここのところの土を持ってきて盛り土をしながら、同時にあそこに、もしも家が流されたといったような場合には、集団でそこに緊急避難しなくちゃいけません。そういうような整備をしていこうというそういう考えでおります。

それからまた浜松市内、馬込川が来ておりますから、馬込川の水門をどうするかということで、その場所もほぼ特定して帰ってきました。そしてここに帰ってきましたら、ファーマーズママというのは御存じですか。浜名湖ぐるっとそこに出てくるいろいろな品物、食材で使ったお弁当をいただきました。皆さんもおいしいものを食べたから、皆幸せそうな顔をされております。

そうしたことで、今日はこの三つの地区の方々の御意見を賜り、私どもの県政に生かしていくためのものがございますので、2時間、長丁場でございますけれども、何とぞ最後までお付き合いいただきますようお願いを申し上げます。

< 発言者 1 >

私は浜松まちなかにぎわい協議会というまちづくりの団体の方から今日出席をさせていただきます。私どもの協議会はちょうど2年前の4月に民間の団体を中心に立ち上げました。特徴といたしましては、「自分たちのまちは自分たちの手で」というのをスローガンにしております。中心市街地活性化というのは、もう10年も20年も前からやられてますけれども、やはり行政さんが中心に行っておりましたけれども、今回自分たちでできることを自分たちのまちなかの団体でやっていこうということで立ち上げました。

もう一つ特徴は専属の事務局員が5名おります。これはその民間の企業から出向という形で、手弁当で出ているんですけれども、あと市の方も1名御担当の方をつけていただいて、総勢6名でこの活動をやっておるわけですけれども、多分日本の中でそういった民間の方からの出向の方が中心になって、しかも専属でやられているまちづくりの団体という

のは、余りないんじゃないかなというふうに思っております。

ただ、その2年前に民間の方から来たときには、全員がまちづくりの素人ということで、手探りで、何をやったらいいのか、何を目標にしたらいいのかということを探していきました。一番初めにまちなかに来て感じたのは、まちの人たちのネットワークが非常に希薄だということです。僕たちが行ったときには、商店街、まちなかには14くらいあるんですけども、でもやはり大きなまちでもありませんので、みんな知り合い同士だというふうに思っていたんですけども、特に若い方、40前後の次の世代を担う方というのは、同級生でも、そのとき初めて名刺交換をする、それくらい連携のないような、そんな状態で、何をするにもそういったものの連携をとることが、まず一番初めにやることじゃないかなというふうに考えました。

どんなやり方かという、まずすぐ動くということで、イベント関係「まちゼミ」というまちの事業者の方が自分の店舗で無料でミニ講座をやるというそういった事業者の方のイベント、それから今はやりの合コンの「遠州コン」ですとか、それから「フードフェス」、これはまちなかの老舗の飲食店の方が集まってやる、そういったイベント、もしくはまちなかの企業の方が集まって、朝月に1回掃除をやる「エコまちクラブ」ですとか、何しろまちなかの人たちが自分たちで動くといったようなことを行いました。これによりまして、2年前に比べればその連携というか、ネットワークというのは少しずつ強化されてきたんじゃないかなというふうに考えております。

今年度から新しい取り組みといたしまして、まちの地権者、ランドオーナーとの関係づくりを強化しております。やはりまちづくりというと、ビルですとか、それから土地をお持ちの方、こちらの方が関わらないわけにはいかないと思います。なかなか難しいことかなというふうに思いましたけれども、1店ずつヒアリングをいたしまして、今どんな状態で生活している、どんな課題があるのか、もしくはどんな不安があるのか、そんなことをお聞きしながら、その連携づくりというのを踏み出しました。

ここで、特にまちづくりをやり、そしてそのまちの人たちとの連携のときに、大きなテーマを掲げました。それはキャッチフレーズということで考えておりますけれども、「これからのまちの使い方」というものをテーマにしました。これは「これから」というのは、今までの価値観というのをもう一度見直そうと。

どうしても中心市街地の活性化というと、自然に言っちゃいますけれども、昭和40年、50年の高度成長のときがいわゆる活性化ということで、そこに戻すというような感覚でい

ろいろ事が進むことが多いんですけども、20代、30代の方というのはバブルを知らないです。20代ですと、バブル終わってから生まれた方もいらっしゃいます。そのような方にいわゆる活性化というようなテーマで話をしてもなかなか進まないのかなと。そういう意味では今の人たちが今後をどう考えているか、そういったようなことをどうやって取り入れていくか、これが一つ課題かなと思っています。

もう一つは、よく言われる人口の問題です。就業人口が減少し、そして高齢人口が拡大すると。本によりますと40年前に比べて人口が1.2倍ぐらいになったということですけども、建物の延べ床は4倍になっているという話を聞いたことがあります。ですから新しいものをつくるというよりも、今あるものを見直す、ストックを増大している、その部分をいかにうまく使うかというのが大きなテーマで考えております。

なかなか答えが出ないので、僕たちもこの2年間に10以上の都市を視察に行ったり、それからいろんなまちづくりの専門家の方、都市計の方、それから大学の教授、それから流通関係をやるバイヤーの方ですとか、タウンマネージャーと言われるような方、いろんな方にお話を聞きましたけれども、答えはないなというふうに感じております。

ほかの都市を例にしまして、同じようにやるというのは無理です。それぞれの都市のいろんな抱える環境が違いますので、それを地域の人、自分たちのことだと思ふ地域の人たちがどこまで継続して考えられるかというものが非常に重要だと思ひまして、その継続的に考えられるシステムというか、流れ、これをつくっていくのが当面の私たち協議会の方の目標とすることがいいんじゃないかなというふうに思っております。

最後に行政さん、まちづくりというと当然今までだと行政さんが中心で引っ張っていくということだったと思うんですけども、やっていて、どうしても行政さんの役割と、自分たちの役割と、分けて考えなくちゃいけないのかなというのが一つと、それから行政さんの、これはちょっとお願いの部分があるんですけども、行政さんの活動というのは、どうしても1年1年で予算と目標を設定して行われることが多いと感じていますが、まちづくりというのは先がわかりません。

先ほど言ったように、将来どうなっていくかというのがわかりませんので、どうしてもここまでやると幾らみたいなの、そういったような設定が非常に難しいと思っていますので、その辺は行政さんの方といろいろ情報交換しながら、活動に合ったそういう制度というのを何か生み出していけると非常に助かるかなと。そういう意味での行政さんとの連携というのがうまくとればいいかなというふうに思っています。

< 発言者 2 >

皆さん、こんにちは。

私は一級建築士として設計事務所に勤務し、建物の設計をしています。本日は設計とは全く違う、全く関係のない市民活動「やらまいかミュージックフェスティバル」のお話をさせていただきたいと思います。

浜松には「やらまいか」と名のつくもの、名のあるものが結構あるんですが、それは皆一種の浜松の「やってやろう精神」のあらわれです。数年前のことです。一つのミニ寄稿文が地元の情報誌に載せられました。音楽のまち浜松は国際ピアノコンクールのようなすばらしい音楽イベントが開催されたり、世界的な音楽の企業が立地していたり、また吹奏楽などの学生の活動を支えたりと、まさに「音楽のまち」と言えるんですが、市民目線にどう映っているのだろうか。もっと庶民的な市民のだれもが参加して気軽に音楽に触れ合い、もっと身近に音楽を感じられるものがあったらいいのではないかと、その寄稿文には書かれていました。

私も同じような思いがありました。私のような者が思うのですから、思う人はたくさんいるもので、いつしか自然発生的に市民が集まり、市民だれもが参加できる市民主催の音楽のイベントをやってやろうじゃないかと立ち上がったのが「やらフェス」、「やらまいかミュージックフェスティバル」です。2006年の秋のことでした。熱い思いのメンバーが実行委員になって、手探り状態で活動を開始しました。

いざ始めてみるとそれは大変なことでした。市街地を音楽会場にしてフェスティバルを開催するには、市民の皆さんや行政の理解が必要ですし、もちろん費用もかかります。しかし「やらまいか精神」とは恐ろしいもので、各方面の多くの方々にお話しさせていただくうちに、行政の方々は厚意的に受け止めていただき、また企業の方々の協力も増えてきました。商店街の方々には積極的に参加してくださる方もあらわれてきました。2007年初夏には出演者募集をすることができ、すると私たちの予想をはるかに超えて集まりました。こうして2007年10月に「第1回やらまいかミュージックフェスティバル」は開催されました。

年が明けると実行委員が集まり、秋口に向けて準備活動を始めます。こうしたことが繰り返され、今年で6回目の秋を迎えます。今年の出演者さんは、今日お配りされていると思うんですが、チラシにも載ってあるとおり、何と291組、1284名になりました。会場が

駅前「キタラ」から始まり「ソラモ」、駅前百貨店のバスターミナル近く、遠鉄百貨店の屋上とか、有楽街、モール街等、延べ24ステージ用意させていただいています。

また音楽のステージ以外には、音楽のお祭りにふさわしく、手作りバイオリンの製作会や、普段触れることのできない楽器を体験できる体験コーナー、演奏を聞きながら食事のできるステージなど、記念グッズや音楽に関係した特産の土産を販売するコーナーなど、盛りだくさんのお楽しみでいっぱいです。

さて、「やらフェス」も何とか6回まで開催できるようになりました。年々少しずつですが形も変えています。このくらいの規模ですと、2日間でおよそ600人ぐらいのボランティアさんが参加されます。ボランティアの参加の仕方もさまざまです。ステージの上で初めてだけど司会をやってみたいからと言って話をされる方、カメラがお好きな高齢者さんが「やらフェス」の風景を撮影してくれて、楽しんで参加してくれています。

毎年こちらのチラシやポスターやTシャツのデザインも、デザインの専門学校 학생さんに公募をお願いしているんですが、1年生のときに実際にボランティアとして「やらフェス」を肌で感じてもらっています。その体験に根差して2年生になってからデザインを考える、これもボランティアの一つです。

私も1年間通じて実行委員をしています。私自身ボランティアそのものです。このようにボランティアにさまざまな参加の仕方があり、「やらフェス」の精神、目的をわかっただけであれば、皆さん自由に参加していただいています。今回もボランティア大募集です。もちろん年齢制限などありません。学生さん、社会人の方、御家庭の主婦、どなたでも気軽に参加いただいて、御一緒に「やらフェス」を楽しんでいただきたいと思います。

先ほどステージの話をしました。このステージの場所を選定することが一仕事なのです。中心市街地、駅前周辺にステージをつくるわけですが、そこにはマンションで生活をなさっている方々もいらっしゃいます。その方々のお邪魔にならないように協調したステージをつくるように心掛けています。何しろ若い人たちはロックアートとかハード系のもものは感動的な音響に乗ってきますので、苦情が出てはいけないと思い、そこらあたりは気を使って、ステージを選定させていただいています。今日受付でお渡ししたチラシの裏には今年のステージ会場が書かれています。そういう事情もあるということをお承知ください。

仲間づくり、ステージづくりと話は進みましたが、最後に資金づくりのことをお話しさせていただきます。演奏会はお金を支払って音楽を聞くものですが、「やらフェス」には入

場料はありません。演奏する方も参加料を払って出演されています。プロのミュージシャンが来られても同じことです。普通は出演料をお支払いしますが、出演者さんも「やらフェス」をつくり上げる我々と同じつくり手の一人と考えているからです。

それでは運営資金はどうしているのかといいますと、企業さんや個人の方からの協賛をお願いしたり、ステージ周辺の商店街さんの協力で店先に募金箱を置かせていただいたりしています。何とか毎年例年どおりのステージを設置しようと苦労しながら頑張っています。資金協賛が大半なのですが、市民の手作りの市民のための音楽祭というところですから、企業色が色濃くなる大手スポンサーの協賛は難しいところがあるんです。私たちの「やらフェス」への思いを御理解いただいて、応援してくださる方々を一人でも多くして、いかに資金協賛をお願いするか、実行委員会は常に考えています。

肝心なことを言い忘れていましたが、ことしの開催日は10月の13日、14日、2日間開催します。各地元の秋祭りとか、そんなことも多いので、先ほど冒頭にお話ししましたが、音楽を演奏するステージだけではなく、あらゆるシーンが詰め込まれたのが「やらフェス」です。ステージもジャンルごとに分かれていて、ステージ間の違ったパフォーマンスもそれぞれ見ながら、秋の一日、まちなかをぶらり歩かれるのはもってこいの楽しくおもしろいお祭りだと思っております。

さて、恐らく今年が目玉になるだろうと思われる出演者さんは、小学生と中学生のバンドです。どこに出るかは9月1日に発売される公式ガイドブックに書かれていますが、この子供たちは過去の「やらフェス」を親御さんと遊びに来られ、そのときから楽器に興味を持ち、演奏してみたいと思うようになり、今年応募してきてくださったと聞いています。この子供たちが大人になったとき、どのような音楽と関わっているか想像もつきませんが、「僕たちはやらフェス出身です」と言っていただけのようなことを考えると、10年も20年も息の長い「やらフェス」を開催できるようにしたいと思うのが、「やらフェス」実行委員会の思いであり希望です。

「やらフェス」は出演者さん、ボランティアさん、聴衆の皆さん、商店街の皆さん、また行政の皆さんの御理解と御協力で育ってきたものです。どうぞ息の長い「やらフェス」を継続させていただくためにも、多くの皆さんの応援でさらに育てていただければと思います。

最後になりましたが、「やらフェス」の認知度はまだまだで、同じ浜松市民であっても知らない方がいらっしゃいます。どうぞ皆さん「やらまいかミュージックフェスティバル」

の宣伝をお願いしたいと思います。本日知事広聴にお招きいただき「やらフェス」のお話をすることができたこと、本当に光栄であり、また感謝しています。ことしの秋、10月13日、14日の「やらフェス」には、知事を初め多くの皆さんに御来場いただいて、音楽のまち浜松を実感していただければと思います。ありがとうございました。

<発言者1、発言者2に対する知事のコメント>

どうも発言者1さん、発言者2さん、ありがとうございました。この浜松のまちなか、駅の周辺ですね。ここのにぎわいをつくろうという、両方ともイベントを中心にしていかにぎわいをつくっていかうということで、期せずしてお気持ちに共通するところがあったと思います。この浜松も、恐らくお二人が活躍される前後から趣を変えてきたんじゃないでしょうか。従来はものづくりのまち、職工さんのまちというイメージが強うございました。

しかしながら、まず文芸大ができました。文芸大は、これ別に選んだわけじゃないですけども、8割の方々が女性です。しかも倍率が非常に高い。ですから頭がいい、かつ美しい、ミスユニバースが出たり、ミス浜松はしょっちゅう出ていますので、そういう華やかな世界がある。若者というのはそれだけでも華やかですけれども、若い女性が1年生から4年生まで、しかも大学院までいるということになって、イメージが少しずつ変わってきたと思います。

それだけではありません。もう一つ花博がございました。それからモザイカルチャーがございました。浜松はこの会場のガーベラもそうですけれども、お花をつくるのに適したところです。その証拠に、浜松の駅の北側、ここは静岡駅と比べてみてください。静岡駅には水の森ビルとかというのがあるんですけども、名前だけです。緑も水もありません。しかし、この浜松駅はモザイカルチャーの技術とそれからお花で、彩りとそれから緑がある。それから区画を変えられました、大学をつくるときに。メインの道路に緑が飾られるようになりました。ですから、今急速にまちのイメージが変わりつつある。そうした中で、どういうふうにすればまちのにぎわいをつくれるかということで、この発言者1さんの方はにぎやかにしていくために、自前で企業の方たちが寄って、そしてイベントを考えられているということがすばらしい。

私は実は中区の真ん中に大学がございまして、学長研究費というのがございまして、自分で使えるんです。まちの中をどうしていったらいいかということで、先生と学生さんに、市と一緒に協力してくださいと、年間300万円を2年続けて出しました。これから

というときにやめてしまったんです。その後どうなっているかわからないですけども、今でも学長、それから学部長、まちおこしのために研究するお金が、県費でございますけれども、出てますので、それを使ってください。だから大学生と御一緒になることはとても大事なことです。ですからまちの人、商店街の人と、それからそういう若い青年たちが一緒になる。若い青年がそこにいるだけで、それだけで華やかです。そのことができる条件が今あるというふうに思います。

花と音楽、これは発言者2さんの建築士でいらっしゃると同時に音楽のイベントをされているということなんですが、あそこに大半の人たちは通ってますか、もしくは下宿しているんですよ。どうして学生まちをつくらないのか。学生の仕事は食べること、あとは勉強することですね。ですからアルバイトする場合がありますけれども、基本的には消費するだけです。貴族みたいな存在ですから。その青年たちが住むような学生まち街を中心市街地の空いているところに、1年間に400人ぐらいいるはずですよ。ですから定員2000人ぐらいいるんじゃないでしょうか。デザイン学校もございますでしょう。私は彼らの住まいをまちなかにすることがいいというふうに思っているわけでございます。

それから楽器づくりについて、発言者2さんがバイオリンと言われた。実は浜松は管楽器といいますか、ラッパ、凧を揚げるときに子供のときからラッパを吹くことができるような口の構成になっている。ですからこれを「音楽のまち」というふうに言われましてけれども、今康友(浜松市長)さんは何と言っているか。「音楽の都」と言っています。そしてこの吹奏楽の楽器だけでなく、あなたが弦楽器と言われた、その弦楽器をつくる、音楽を教える人が、自分でバイオリンをつくって教える人がここにいるそうです。ですから弦楽器と管楽器がそろって非常に強い。それから先ほどピアノコンクールのことを言われましたけれども、オペラコンクールもあります。これは3年に1回開かれますから、ここを「音楽の都」にすることができるというふうに思います。

そして10月の13、14日にイベントをなさるとおっしゃいましたけれども、これはもっと定期的にやった方がいい。といってもそれは大変かもしれませんが、しかし1カ月に1回とか1週間に1回、何曜日にはやるとか、あるいは1カ月に1回、5のつく日にはやるとか、あるいは1カ月に1回、第3土曜日にはやるとか、そうなっていると、これはそのときはいろんな音楽が聞けるということになりますから、これを定期化していくということがとても大事です。

そのときにお金をどうするかと言われましたが、人が来ればそこで飲食をしますので、

そうすると飲食をするであろう界隈の商店街の人と一緒に結ぶのがいいということで、今日ここで発言者1さんと発言者2さんが会ったのが百年目、この二つが結びつくと男女共同参画で、今まで職工さん中心だったのが、しかも何か年齢的にもぴったりの感じでいいカップルができるんじゃないか、それはイベントをつくる上でのですね。そういうことができるんじゃないかというふうにも思うくらいです。

ですからハードではなくて、やはりソフトでありますので、浜松のやらまいか精神を女性が言うようになったというのは非常にいいというふうに思います。そして今ヤングレディのパワーがあそこにあって、その発現をどうしていったらいいかということで、今出口を求めて悩んでいるというか、出口を求めた潜在力がたまっていると言っていいというふうに思いますので、私は文芸大がまちをどうつくるか、学生まちをどうつくるかについても、そのことを専門に学ぶ人たちなんですよ。デザイン学部というのはそれです。

こういう生産物のデザインから、こういう全体の空間デザインまで全部する。それからメディアのデザインもします。それからこういうイベントをどういうふうにして動かすか、これが文化政策のマネジメント、それを専門しているところもあります。だからフルに使えば、それ自体が彼らの社会参加になりますし、しかも彼らにとって教育的価値がございします。同時にそれはほとんど無料で使えるということです。

ですから何かイベントに彼らの知恵をいただいて、そして浜松のギョウザを、どこかの店のギョウザ、これはただで入れるというのと、もう一つそれぞれの協議会の表彰状を差し上げるだけで、十分に名誉というものは満たされ、大学の社会参加としての功績にもなるということになりますので、私は今行政と皆さん方、NPO、あるいは企業の方と言われましたけれども、大学を巻き込んで、あそここのところを中心にしてやっていくのがいい。

それから来年、多分「エンジン01」というのが来るはずですが。これは各県回っておりますけれども、浜松に目をつけました。中心人物は三枝成彰という方です。これは静岡県は余り知られていませんが100人以上、学者や芸能人や政治家の一部や、いろんな人が来られて、まち中がそういう文化イベントになるんですが、その中心人物が林真理子という作家と三枝成彰という方です。ですから、これから1兩年かけて花博10周年に向けて、この浜松地域が変わっていくであろう。

それから私が注目したのは、発言者1さんの言われた「これからの新しいまちづくり」という言い方ですね。今まで太平洋工業ベルト地帯の重要な一端をこの浜松は担っていたわけですが、これからのまちは「美しいまち」といいますか、そういうものに

変わっていかなくちゃいけない。工業都市とか商業都市というよりも「農芸都市」というふうなものに変わっていくことが望ましくて、そうした「農芸都市」をつくろうとしているのが、実は新東名の近辺でございます。

ああしたところと交流が深まりますと、さらにまた浜松の市街地の可能性も高まるであろうというふうに思っております、この地域を新しい 21 世紀型の環境を重視したきれいなまちにしていく。そしてそのイベントについては、そのまちなかも産官学、皆一体になってやっていくと。

特に今のところは、私は浜松の駅の北側ですね。そしてうちにも総合庁舎がありますが、あの総合庁舎をもっともっと活用していただく必要があります。どうもハードは十分にありそうなんだけれども、ソフトが十分でない。しかしソフトをやる人、男も女も学生も先生もいらっしゃるということで、私ももしそこで何かやれということでございましたら、もうやらまいかで、まだ「やらまいか大使」をやっておりますので、加わらせていただきたいと思っております。応援いたします。

< 発言者 3 >

篠原地区の自治会連合会長をしております。篠原地区につきましては、御存じの方も多いと思いますけれども、東西に約 4 キロ、南北 2 キロ、その中に国の動脈が 3 本走っています。国道 1 号線、それから J R 東海道線、新幹線。場所的には平野ということで海拔が 3 メートル、そして市街化調整区域がほとんどですので、建物の高さ制限がございまして、10 メートル以上の建物がほとんど皆無という状況でございます。

私たち昭和 30 年代後半に小学生時代を過ごしたわけですけれども、その当時は一番高い峠が大体、子供の目線ですのでわかりませんが、7～8 メートルぐらいじゃないかと思えます。それから実際に海岸までは約 1 キロぐらい、きれいな砂浜がずっとつながっていたんですけれども、現状ではその約半分、300 から 500 メートルの海岸でございます。7～8 メートルあった一番初めの峠も、上を削られまして現在 4 メートル弱で、きれいに整備されて階段状で防潮堤がつくられているんです。

それを過ぎますと浜名バイパス、篠原東から約 1 キロぐらいからバイパスに乗って行くんですけれども、今バイパスの乗り合いの耐震工事が進捗していますけれども、浜名バイパスは 7 メートルあります。それ以外はほとんどありません。

また昔に戻りますけれども、我々の時代では一番高い峠まで行くのに、大体 3 メートル

ぐらいの堤が5カ所ぐらい存在していたんですけれども、40年代にかけて区画整理、土地改良で、ほとんど畑になってしまって改変されてしまっています。少し坪井町にかけては若干松並木が残っているというのが現状でございます。

バイパスから東に関しましては、御存じのように、3年前に西部清掃工場とトビオ、浜松の温水プールができた関係で、取付道路等の関係で、ほとんど平坦なところなんです。ですから今14.3メートルの津波が想定されているんですが、それが来たら一気に流されるというような現状でございます。

前からその津波が来た。それから今度は浜名湖の南口から、あそこに入り切れなかった波が、今度は新居と舞阪の二手に分かれます。それから次に新川、いわゆる佐鳴湖から浜名湖へ注いでいる川が、我々の地域の新幹線のすぐ北側にあるんですが、そこから落ちてくる。南から来て、西から来て、北から来て、三方から水が来て、早く言えば液状化現象で1メートルぐらい地盤沈下するんじゃないかと思えますと、完全に沈没する地域でございます。

そのような地域で、私平成21年から自治会に関与したわけですけれども、自主防の組織、それからいろいろやってきた中で愕然といたしまして、絵にかいたモチで全然機能しないんじゃないかということでびっくりしました。

自治会というのは上意下達で上から命令して下が動くという組織ではないものですから、困ったなと思ひまして、まずそれには自分が率先しなければいけないということで、21年のそのときに災害ボランティアコーディネーターという講習会、一番受けやすい講習会ですが、その資格を取りまして、「篠原地区で何人いますか」と聞いたら、私の前に2人が受けているだけで、私含めて3人目ですと。広い篠原地区で3人しかその講習会に出ていなかったんです。

それでも、その3人で何とかしようということで事を起こしまして、そうしましたら消防団がありまして、8名ぐらいで。防災について資格がありますよと、声を大にして言いまして、強引に「消防団長、おまえ行ってこい」ということで講習会を受けまして、やっと4人。消防団の下に7人おられますので、私を含めて11名で「防災ネットワーク篠原」という一つの団体を立ち上げました。

まずとりあえず何かつくりたいと言ったら避難所づくりです。自治会、役員、それから各種団体等をお願いしまして、図上訓練をまず実施いたしました。翌年に図上訓練の実践ということで、小学校の体育館を借りて、避難所訓練を実施しようとした矢先に3. 1 1

の東日本大震災が起こったわけですが、我々準備してましたので、とにかく津波がくるぞと。いわゆる災害ボランティアコーディネートでは救護所、あるいは避難所の運営をどうするか、受け入れをどうするか、それを実際に体験してみるということで、その年の夏は実施いたしました。だけど、やっぱりやってみますと、津波の話で騒然としてしまうわけですね。

そこで翌年の2月に津波シンポジウムということで、県の地震防災センターにお願いして講演していただいたりして、いわゆる回覧板だけで応募したんですけれども、予想以上に190名ぐらい集まりまして、会場の都合で断ったくらいではありますが、こういう形で防災が浸透しているわけです。

そんな中で浜松市としましては、同報無線機がようやく2基篠原地区に新設されました。トビオの駐車場の北東のところに1カ所と、バイパス坪井インターのすぐ南に1カ所、2基増設されて、従前2基ありまして、ようやく4基、まだまだそれでも十分な範囲を網羅しているわけではございません。我々は少なくとも要望としてはもう2基、合計6基ぐらいを要望しているんですけれども、2基しか設置されなかったというような格好でございます。

そんな形であとは津波避難ビル、3階建て以上ということで指定してきているわけですが、篠原地区に11カ所、そのうち2カ所は今言ったように西部清掃工場とトビオのプールですので、南へ向かって逃げていく人はだれもいないということで、9カ所があるわけですが、9カ所ではとても太刀打ちできないということです。

現状では、だからいろいろ自治会として考えたり、あるいは相談しても、本当に手の施しようがないというところに今新聞紙上で一条工務店さんからの300億の寄附金、17.5キロの防潮堤の整備の話がのぼりまして、何とか一筋の光を見つけたなと思うんですけれども、これまたハードの面だけで100%解決したというわけにはいきませんが、減災という立場からとっていただいて、我々にとっては非常に心強い施設じゃないかなと思います。

それで現実に今動き始めておられるんですけれども、現状はまだ、知事も先ほど現場を視察していただいたという御挨拶で非常に心強いんですけれども、まだ机の上のプランでプロジェクトチームが結成されたというのが現状でございます。先だっけの新聞紙上ではもう既に一条さんからは今年度分の多額の寄附金が県の方へ届いたということですので、まず早急に手のつけられるところから手をつけていただきたい。

これ教育問題も同じなんですけれども、100%ベストという状態で事を臨もうと思ったら、とても不可能だと思います。ベターの状態です。まず始めていただきたい。その点で、うちだけ申しわけないんですが、篠原地区としましては、例の県の遠州灘海浜公園の用地もごさいますし、トビオの浜松市のいわゆる公園用地もごさいます。それらのものをすべて15メートルのかさ上げをした防潮堤をつくっていただいて、先ほど知事が言ったように、平時のときはそれが市民の憩いの場ということでも結構ですので、まずとりあえず手掛けていただくところから手掛けていただきたい。

考えてみても、天竜川から浜名湖西岸まで一直線で行けるといことはとても不可能ですね。昔の道路と一緒に、やっぱりある程度二重三重で、南北幹線道路を遮断するわけにはいきませんので、そこを相互に補完するような形で、二重三重につくっていただくということで、遊休農地の買い上げとか、そういう問題にそれから手をかけていただく。今のところとりあえず県の用地として確保してあるところから手をつけていただければありがたい、そんなことを願っております。

私の方は、誠に申しわけないですけれども、その辺をお願いしながら、今度は逆に自治会としてどういうことができるのか。現状では防風林もマツクイムシ、年間1回空中散布、地上散布しますけれども、松枯れが非常に顕著な状態でごさいます。もう既にそれぞれ大学の先生方が提唱している地域に合った植栽をしようということで、もう少し松じゃなくて、横に根の張る植栽をなささいというそれぞれの研究が進んでいますので、そういうものもやっぱり我々自治会が手を携えてしたいなと思っています。

そんな関係で、将来的には自治会が管理するという形で下草刈り、それからそういうものも自治体が率先してやります。みんなに愛される堤にしていくというような方向に持っていけないと、荒地のままでは、それこそ不法投棄の捨て場、あるいは夏場は生活の場に現実に前の海岸はなっているわけですので、それらの対策をとっていただきたいということで、その辺をまたこれから地域に帰ってから話し合いを進めていきたいなと思います。

<発言者4>

こんにちは。私は入野漁業協同組合に所属しております。

「入野漁協ってどこのあるの？」って皆さん思われると思うんですが、実は入野町、そして大平台、佐鳴台、海老塚と隣接している湖です。大体の方はおわかりになると思うんですが、湖西の方は全然御存じないかもしれません。私はその佐鳴湖で天然ウナギ漁の漁

をする組合の理事ですが、組合員は全部で50数名いるんですが、なかなか佐鳴湖は小さい湖でして、またその小さな湖の中で中学生、高校生、大学生、そして社会人の漕艇もやっております。

そういったスポーツを楽しむというか、それを行う団体さんと漁協、そして遊漁者、ボートを借りて釣りを楽しんだりとかする遊漁者とがなるべく仲良くできるようにということで、毎年1回話し合いを持って、佐鳴湖の湖面の利用について話をするんですが、やはり問題になるのは佐鳴湖のごみですね。

皆さんは佐鳴湖が全国湖沼の部の水質ランキングでワースト1になったというイメージが強いので、佐鳴湖と聞くと「ああ、汚い湖ねえ」って思われると思うんですが、もう今は大分きれいになっておりますし、またその佐鳴湖の色を見て汚いと言われる方が多いです。薄い乳白色のモスグリーンのような色をしているのが夏ですね。緑藻というプランクトンがたくさんいまして、そして寒くなると珪藻というちょっと茶色っぽくなるんですが、そのように本当に温度によって色を変える佐鳴湖は、リンと窒素が多いためにCODが高くて、全国ではワースト1をとりましたが、平成21年のときに昭和54年以来ワースト5を獲得しました。今はもう本当にワースト10からも外れようとしています。

そんな中で私たち漁協は10年ほど前から佐鳴湖のよさを、水質浄化の活動もさせていたしましたが、佐鳴湖のいいところをみんなに伝えようというふうに思いました。近隣の小中学校には出前学習に行き、そして佐鳴湖の魚の豊富なところ、佐鳴湖は汽水湖ですので、塩分のある浜名湖の水と、そして新川の上流、山の方から淡水の水が入っています。なので約50種類ぐらいの水中生物がいます。そのなかにはクロダイとかイサキ、そしてスズキ、サヨリ、いろんな海の魚が入っていて、最近ではこのぐらい大きなドーマンも採れるようになりました。淡水では当然コイとかフナとかハゼとか、たくさんの魚がいます。エビもたくさんいます。

そんな中でそういったものを、釣りの人も多かたりするんですが、佐鳴湖では釣りをしてもなかなか釣れないんです。釣りをよく佐鳴湖でやられる方は御存じだと思うんですが、「佐鳴湖じゃ素人は釣れんよ」というのが釣り師さんたちの合い言葉なんですね。私はどうして素人が釣れないのかなとよく考えたんですが、やはり佐鳴湖は魚種が多いので、そんなたまに来て、そう珍しくもない餌を出されても、湖の中にたくさんおいしいものがありますから、湖の中の魚よりももっとおいしいものを入れないと釣れないんだなというふうに私は考えております。そういうふうに子供たちに、やはり佐鳴湖を愛してもらおう

とあって、10年間環境学習をやってまいりました。

その中で佐鳴湖は一部県の管轄の土地もありますが、周り、周辺は浜松市の管轄で、佐鳴湖公園と呼ばれています。湖面は県の都田水系の新川の一部として県が管理していただいています。県と市と、そして私たち漁業従事者、また佐鳴湖の流域の自治体の皆さんで私たちは平成17年に「佐鳴湖ネットワーク会議」というのを立ち上げました。そしてそれが21年の末に終了して、現在24年4月から「佐鳴湖のみらいを育む会」という非常にわかりやすいネーミングをつけて、佐鳴湖地域協議会の一部として発足しました。

その中では、水質をよくするということは当然ですが、これからは佐鳴湖の周りの環境に目を向けなければいけないというふうに話し合いました。私たち漁協は、佐鳴湖がきれいになっていってほしいことと、きれいになっていくということを信じつつ、水質浄化活動に10年間関わってきましたが、その当時から佐鳴湖がきれいになればなるほど、一般の方が佐鳴湖に来ます。

そしたら湖で遊びたい、カヌーとか、ヨットとか、御自分でつくられたものを浮かべたいと思うのは人情ですね。それにバーベキューをしたりとか、花火をしたりとかいうふうに、そこでも遊びたいと思われる方が多くなりますが、よくなるにつれて、そういうこともどういうふうに皆さんにこういうふうに使ってくださいねという都市公園法をあてはめたものを知らせていかなければならないということ声を大にして言ってまいりましたが、なかなか考えるのは水質浄化ばかり、CODを下げる、国の環境省の数値に近づけることに一生懸命だったんですね。

それで、今その10年間の環境活動を続けていて、私たちは漁業者として佐鳴湖の自然の豊かなこと、そしてその漁業という一次産業ですが、いかにそれが地域と密着しながら、そしてその佐鳴湖の資源を保護しながら漁業しているかということも伝えながら、また実際に見てもらったりとか、佐鳴湖と一緒に出たりとか、そういうことをしながら活動してまいりました。

今やはり問題が一つにできないんですね。県の管轄のところと市の管轄のところがあるのと、県のところは知事、公園法が使えないんです。県の土地は非常に素晴らしいですね、その文言が。自由助なんですね、県民の。素晴らしいじゃないですか、自由に使っているんですよ。でもそこから外れると公園なんです。公園では花火がいけない、バーベキューもいけないですね。でも県のところはいいんですよ。

それを知っている方たちはバーベキューをやりに来たりとか、花火をやりに来て、私は

一番困っているのはロケット花火なんですね。ロケット花火って、拾いに行くことを前提にしてないですよ。どこか飛んで行って、さよならですね。手持ち花火は捨てますが、そのロケット花火が私たちの船の上にぽんぽん落ちていたりとか、当然佐鳴湖にもいっぱい落ちてはいるんですね。

時間的に縛りもないので、皆さん自由に使われるんです、そのものですね、自由自助、そのものなんです。やはり当然県の担当者の方たちは、モラルを守ったやり方ということ、当然それは県民を信じて自由に使ってくださいよと言ってくださっているんですが、でもやはりその中で4日の日に佐鳴湖の花火大会がありました。御覧になった方はいらっしやいますか。ありがとうございます。

すごくすばらしくて、佐鳴湖で一晩素敵な1時間の花火大会なんです、そのときにやはりこんなに人が見えるんだったらすごいなと思っていて、翌日、うちは佐鳴湖公園のすぐ隣、佐鳴湖のほとりに近いところに住んでいるんですが、翌日窓を開けてびっくりです。ものすごいごみの量なんですね。ごみを捨てているんですよ、自分たちが食べたものを。あれは絶対に数の力ですね。一人だけだと目立つんですけど、みんな置いていくので、ああ、いいんだ、置いていっていいのかなという意識があると思うんですね。

そういうところで県の管理であろうと、市の管理であろうと、私たちは同じ目的で、同じように県民や市民が使いやすい何か条例をつくって、当然県は県のところで条例になると思うんですが、皆さんが利用しやすいように、バーベキューやっちゃいかんよ、花火もだめだよじゃなくて、バーベキューができる場所を提供して、時間をちゃんとつくって、ごみの持ち帰り方もちゃんとみんなで約束を守れば、私はできると思うんですよ。

年間たくさん見えるバーベキューをやられる方というのは、「佐鳴湖がいいな」「佐鳴湖見ながらバーベキューしたら気持ちいいな」と思って来てくださっているもので、それを締め出すのではなくて、何かみんなが使いやすいように、そしてごみをちゃんと持って帰るという、そういったことは私たちに課せられているものだと思うんですが、私、環境審議委員を3期6年間やらせていただいて、やはり県の方の環境に対するいろんなマニュアルとかがございいますが、なかなか県民に伝わらない。

当然それは意識がある方は、意識を持ってなされるんですが、やはり意識のない人にそれを伝えなければいけないというところで、ぜひ今後、県の環境指導員っていらっしやるんですが、いろんなところに行かれて、子供たちだけではなくて、子育て世代とか、そういったところで、佐鳴湖の環境を守るとは、自分たちの生活、そして地球を守ることになる

んだよと私はみんなに伝えるんですが、ぜひ県の環境指導員と、地元の環境を守る私たちがコラボレーションで、協働で何かできたらうれしいなと思いました。ありがとうございました。

<発言者3、発言者4に対する知事のコメント>

いやもう感心しました。発言者3さんと発言者4さんはともにそれぞれの地域のリーダーとして御活躍くださいまして、発言者3さんの場合には、お若く見えますけれども、60代の後半だそうですが、20代からボーイスカウトというものを通して、常に社会的な実践活動の経験を積んでこられて、今自治会のリーダーとして活躍され、この篠原地区の防災、特に津波の対策に関して、非常に切迫感を持った状況を訴えられたと思います。

当初防災士が3人ほどだったと。それでも今増えたとはいえ、ほんの10人前後ということで、県はそういう防災士の資格を幾つかのレベルで持っていますので、これはもうぜひ小野田さんの御指導で青・壮・老、どの方たちもそれぞれのレベルでの防災士の資格を持つというそういう自治会における資格を持っている人の割合をトップクラスにしていきたいような運動をしていただけないかと思います。

これはもちろん津波そのものに対する対策にはなりませんけれども、いざというときに何をするべきかということを知っている人が増えるということは、確実にそれは防災力を高めるというふうに思います。さはさりながら、とにかく防潮堤をつくらなければならないということで、9月の定例議会で受け皿の基金ができますれば即やってまいります。対策を講じます。できるところからやっていくということでもあります。これは議員の先生方がいらっしゃるから、ぜひ通してください。当たり前だというような顔をされておりますので、そうしますとできるところからやっていくということでございます。

14メートルの想定、これはM9、最大の想定のものでございますけれども、こうしたものを想定内にしなくちゃならない、そういう時代に生きておりますので。ただ、いろいろなやり方があると思いますけれども、高いところに逃げる以外、助かる方法はないんですね、津波の場合。泳ぐ、あるいは浮き袋があったらいいというふうに言う人がいますけど、そんなもんじゃありません。時速数十キロでいろんな、いわゆる瓦礫と一緒にぶつかってきますので、まずのまれたら99.9%助かりません。だから高いところに行く以外にないので、ですから篠原地区は篠原地区だけでなく、浜松全体の中でお考えになるというふうなそういう非常に辛い選択が今迫られているんじゃないかと思います。

一方、お金がきますれば、私はこれを浜名湖から天竜川ですね、17. 数キロやりますが、これはしかし湖西はどうか、磐田はどうかということがすぐ出てまいりますので、ですから遠州灘は、この日本の中で我々は海岸線 505 キロ持っております。そのうち 280 キロ分が人が住んでいるところがございます。一応 95%終わっておりますけれども、一番不安に思っているところに、こういう 300 億円というものが天からの恵みとして入ってくる。これは可及的速やかに使わないといけないということで、やれるところからやっていくということを申し上げる以外に今のところはありません。とりあえずその篠原の方々がどういうふうになれば助かる、その防災士の数を増やしていただきたいと思えます。県の独自のものを持っております。恐らく日本一の防災士の訓練ができるはずです。

それから発言者 4 さんには本当に感心しました。さすが静岡県環境審議委員会の委員というよりも、優れているから審議委員になっていただいたと思えますけれども、佐鳴湖を通して小学校、中学校と大学ですか、そういう青年たちを現場で鍛えるというか、現場で佐鳴湖の実態を御説明になり、その意識を高めていく活動をされてこられて、事実佐鳴湖はだんだん浄化されてきた。しかも佐鳴湖に生きている生物はかなり格が高くて、高級品じゃないと食べないということで、そういうものを食べておられるから発言者 4 さんみたいに立派な女性が生まれるんじゃないかと思ったりしたぐらいでございますが、ただ先ほど言われました水質浄化というところに今まで注意が集中していましたが、佐鳴湖の周辺を含めて考えるというのがまたすばらしい。

それですから、これから未来を見据えるプロジェクト、しかも先ほどのごみの問題、モラルの問題ですけれども、イベントの後始末をどうするかというときに、ごみを出すから禁止するという短絡した思考でなくて、両方生かす、楽しむ、同時に地域に迷惑をかけないというその答えも出されていますね。ですから後はこれを行政が後押しをして、そういうふうにお手伝いをするということに尽きるということで、こういう陳情の仕方は見事です。言うことありません。

ですから、こういう人がその地域の町なら町の町長さんとか、しかしそういう職業とするのではなくて、発言者 4 さんのような方が増えれば、おのずとその地域の特性も上がっていくであろう、特性というのはモラルも上がっていくというふうに思ひまして、私は佐鳴湖はもともときれいなところで、それが汽水域として楽しまれている間に、人々が生活雑排水やら、いろんな汚水を流すようになって、これを今、元に戻しつつあらわれて、まだただし富栄養化で、これをまたポジティブにとらえながら、周りの景観を含めて、この地

域をきれいな水辺のある景観というものにしていこうというのは、これは日本の、ある意味ではそんなに大きな湖じゃないので、そこを見ればその歴史を通して他の地域に非常に啓蒙的な、教育的なモデルになるというふうに思います。

これは世界中似たようなことがあちこちで起こっておりますので、そうしたモデル地域になり得る、ごみの処理の仕方も含めて、極めて具体的ですので、これは一緒にできるように相談しまして、県の方としても県の公園を持っているのですから、そのところを地域の方々の生き様にかなうように、そういうものにするように働かせてください。ありがとうございました。感心しました。

<発言者5>

私は、中小企業の経営者の立場からお話しさせていただきたいと思います。弊社はグラウンドゴルフとか、ノルディックウォークといったスポーツ用品、どちらかという中高年のスポーツ用品の製造メーカーです。また中高年の「自立体力検定」といまして、言ってみれば体力テストみたいなサービスを開発いたしまして、その普及活動をしている会社でございます。

最近「健康寿命」という言葉を皆さんお聞きになったことがあると思うんですが、厚生労働省が「健康寿命」のデータを発表いたしました。静岡県は「健康寿命」が一番長い県ということで、これは大変すばらしいことなわけで、静岡県が1番で、2番が愛知県だったかと思いますが、それでも平均寿命と比べますと、約10歳ぐらいの差があります。

ですから10年間は一人では生きていけない、病んでいるという状態が日本人の平均的な姿ということでございますが、事実、グラウンドゴルフは老人クラブとかで盛んに行われているわけですが、グラウンドゴルフやっている方の平均寿命は明らかに長いということを実感しております。医療や福祉にかかる税金やその負担を減らすためにも、今は全国ナンバー1ですけれども、県民の健康寿命をさらに伸ばすための施策を徹底的に推進して、日本のモデル県になっていただくように静岡県がならないかなというのが一つの提案でございます。これについては後ほど県知事の御意見をお伺いしたいなというふうに思います。

もう1点ですけれども、弊社の自主事業で、主にプラスチック成型なんですけれども、自動車部品の製造を行っております。御承知のように、自動車部品の製造は大変今厳しくて、東南アジアのタイにも私どもは進出しておりますけれども、製造業は国内だけで生き

残っていくことは大変難しい時代がきました。これはかつてない歴史的な転換期だと思っております。

これから日本の役割、日本は非常に今円高ということもありますけれども、いずれにしても高コストだものですから、そうはいつでも技術とか開発の拠点という意味では日本の役割は非常に重要なので、そういう部分を日本に残して、ものづくりといいますか、製造そのものは海外で行う。販売も海外、日本は一部、日本の国内需要は日本でというような形態に変えていって、日本に海外から利益を還元するような仕組みをつくっていく必要があるのではないかなというふうに感じております。

しかし、中小零細企業が海外に進出するというのはなかなか難しく、そういう意味でこれから、これは提案なんです、静岡県あるいは湖西市でもいいんですけれども、行政がみずから海外の東南アジアの国々に静岡県工業団地をつくって、逆に県内企業を誘致するというような発想が必要ではないかというふうに思いますが、この件につきましても知事のお考えをお尋ねします。

これは私、湖西市出身だものですから、湖西市長にも何度も言っているんですけども、なかなか——。これはどうしても海外に企業が行くのを税金で応援するようなふうになってしまう。そうではなくて、当然国内で生き残っていきたいわけですし、国内の雇用を守っていかなきゃいけないと私どもも思っているわけですが、そのために海外に出るわけですから海外に出て日本がなくなってしまうわけではなくて、日本に技術や開発部門を残しつつ、ものづくりそのものを海外で行う。そして海外の利益を日本に持ってくる。それによって日本が潤う、そういう考え方、発想の転換をしないか、ということをもろもろ避けて、日本の中で何でもやれよと言っている、結局は生き残れない。日本の製造業というのは本当に今厳しい状況を迎えていると思います。

そういう意味で、全く新しい発想ですけども、海外に行政自らが工業団地をつくると。これは海外の工業団地は非常に大規模にもう既にたくさんのごとこにございます。それをゼロから開発しろというわけではなくて、例えばその一部ですね、何十ヘクタールか何ヘクタールを県なら県の権利として買って、それを県内企業に移すと。各地域、各国の地方行政、地方政府とも連携して、少しでもリスクを減らしていく。その土地を中小零細企業用というふうにするれば、先行投資して税金を一部使うことに、税金か、あるいは税金に形を変えたものになると思いますけれども、最初はそういう投資が必要ですけども、結局は回収できると。最後は中小企業に売って回収するというので、税金のむだ遣いにはな

らないというふうに思います。

日本はデフレですけれども、海外の場合は、特に東南アジアは土地の値段も、建設コストもどんどん、どんどん上がってしまっていて、仮に10年ぐらい前にインドネシアでそういうことをやっていれば、今から出てくるコストのほぼ5分の1ぐらいで進出できた。けどもバブルでどんどん、どんどん上がってしまっているのが現状です。ですから今からでも新たにアジアにそういう考え方で投資して、出れるところに出ていくというようなことが、結局はひいては県民のためになるんじゃないかなというふうに思います。

この2点です。健康寿命を伸ばす施策を徹底的にやったらいかがでしょうかということ、海外への行政自らが工業団地をつくるということ、この2点について県知事の見解をお伺いします。

<発言者6>

こんにちは。私は、湖西市で子育て支援を行っているNPO法人ポレポレに所属しております。私は39歳で4人の子供がいます。一番上は小学校6年生の男の子、2番目は4年生の女の子、3番目は1年生の女の子、そして3歳、年少さんの女の子がいます。

4人の子育てをしながら子育て支援をやっているんですけども、どうしてやり始めたかと言いますと、私は12年前、子供がまだ一番上の子が半年のころ、自分がはしかにかかりまして病院に入院したんですね。もう歩けないかもしれないといって、はしかの後遺症で急性散在性脳脊髄炎というものになりました。その後3カ月間入院して、歩くこともできず、自分でおしっこや便器に座ることもできず、車椅子の生活を送ったんですけども、そのときに生まれて半年の子供を家に置いて、そして私の両親も働いていましたし、主人ももちろん働いていましたので、子育てに本当に困りました。

子供を一人で育てていくことができないなということを実感しまして、その当時、子供はいろんなところに預けて3カ月間乗り切ったんですけども、その後私が退院したら、一人では余り歩くことができませんでしたので、いろんな人の手を借りて育てることしかできませんでした。そして私がだんだんと元気になって歩けるようになってきたときに、子育てを一人でやらなくてもいいような環境をつくりたいと思い、息子が3歳になる年のときにNPO法人ポレポレを立ち上げました。

当時はNPO法人ではなく「NPOポレポレ」という名前で始めたんですけども、やり始めたきっかけは、同じ世代の子供たちと息子を遊ばせたいと思ったんですね。第一

子なので、子供の友達も自分の友達もまだ少なかったんです。私もそれまで働いていました、社会福祉協議会で働いていましたので、地域との密着もなかったのも、友達もいず、大学時代以外はずっと新居町で暮らしていたにもかかわらず、どこにだれが住んでいるのかも知らなかったんです。

そしてポレポレをやり始めました。最初は20家族から始めたんですけれども、どんどん、どんどん増えて、今270人の子供がいます。そしてそのお母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、パパたちが来るので、300人以上来ることがあります。今日も積み木で遊ぼうという活動をやっているんですけれども、今日を含めて5日間で300人の子供や親御さんたちが来てくれています。

ポレポレは毎週活動とか、毎月活動をしているんですけれども、今一番人気があるのは、毎週金曜日の放課後に活動している「あそびっこ広場」というものなんです。それは昔、普段地域の生活の中にあっただものなんですけれども、今ではこちらから提供しないとなくなってしまった多世代で遊ぶということなんです。

そこに集まってきた親子は、新居の体育館でやるんですけれども、そこにあるもので自由にまず遊ぶんです。フープを使って遊ぶ子もいますし、ただ走り回る子もいます。そしてボールで遊ぶ子もいるんですけれども、小さい子は大きい子の言うことを聞き、大きい子は小さい子の面倒を見る。そしてルールを守る、またルールを自分たちでつくるということをその中でやっていくんです。毎週金曜日、それを楽しみに一番多いときは100人近くきます。暑い、こういう夏でも、蒸し風呂のような体育館に50人ぐらい来ます。それだけそういった場がないので、そういった場を必要としている親子が遊びに来るんですね。なので、とても貴重な場だなと思っています。

私が今回このお話を伺ってお話したいなと思ったのは、そういった子供たちの環境は今NPOなのでいろいろと揃ってきているんですけれども、そこに関わっているお母さんたちの可能性を伸ばす場がまだまだ少ないなと思うんですね。昨年度、県の子育て支援課の事業で、子育て支援者実践交流会というものを開催しました。私はその実行委員として活動させていただき、県西部ではアクトシティの方で開催して、支援者100人が集まったんですね。

そのときにポレポレから、いつもママとして参加していただいている方たちにスタッフとしてお願いしました。そしてその場で私すごくびっくりしたのは、ママたちが結婚し、子育てをし、そして少しパートをしている方もいます。なので、仕事をしてきた人である

のでとても気がきくんですね。いろいろなことに気がつき、いろいろな場面で活躍することができました。

女性というのは、ママが終わった後も、例えば介護をし、また仕事に戻り、いろいろな役を一人でこなすんですね。で、そういったお母さんたちが持つパワーとかノウハウ、技術、知識、経験を生かす場がもっともつとあったら、お母さんたちのネットワークをもっともつとアピールできる場があったら、もっと地域の中が活性化するんじゃないかなというのを思ったんです。

でも、これをつなげていく場とか、発揮する場がまだなかなかないんですね。地域の役員を見ましても、高齢化が進み、私たち世代が役員をやることがほとんどないです。60代、70代の方がやって、私たちははいはいと聞いて、それに乗っかっているだけという形なんですけれど、そうではなくて、私たち世代も何か活躍できる場があって、そして年上の方たちと一緒に何かできる場があれば、もっともつといろんな視点でいろんなことを考えられるんじゃないかなと思っています。

私はこれからポレポレを通して、とてもお母さんたちがつながりやすい、集まりやすい環境をもっともつとつukっていきたくと思っています。なので、行政の方もそういったママたちが持つパワーだとか、NPOが持つノウハウだとかネットワークをどんどん生かして行っていただきたいなと思います。

<発言者5、発言者6に対する知事のコメント>

発言者5さんからは明確に二つの論点を出していただきまして、まず健康寿命の件ですが、健康寿命というコンセプトは世界保健機構が出されたわけですね。WHOがお出しになられて、そして厚生労働省がそれを適用して、今回日本で初めて47都道府県の、歳はいつているけれども日常生活に支障を来さないというそういう健康な寿命ということで全国を見たところ、女性が静岡県が1位で75歳、そして男性の方は70歳を上回っておりますけれども、愛知県に次いで2位、こういうことがわかりました。

しかしおっしゃるとおり、平均寿命と比べると、それぞれ10歳ぐらい差があるということなので、これを真剣に考えなくちゃならない。これは新しい考え方だと思います。しかしまずは健康寿命につきまして、実は愛知県の男性は全国3位ですから、したがって男女両方の平均をいたしますと、静岡県が健康寿命は日本一です。これはまず誇っていい。だれもが先に考えた、スポーツというよりも、食生活だったようですね。

これは『週刊ポスト』の7月2日号で、どこが1番か、静岡だ、なぜか。読まれましたか。「食材が219品目ある」と書いてあるんです。つまり日本一です。それからお茶をよく飲むと。219というこんな半端な数字を東京の週刊誌の記者がよく知っていたなと思います。ついにこの食材の王国というコンセプトが日本中に知られることになったかと思って、大変喜びました。

それからお茶も、茶どころというのは狭山もあり、宇治もあり、あるいは鹿児島も、あるいは佐賀県の嬉野だとか、日本中ありますけれども、しかしお茶の一番の生産量、生産高、流通量、どれも4割、4割5分、6割、日本一です。ですからここは「茶の都」なんですね。静岡県は「お茶の都」でございます。

今年の献上茶は浜松から出されました。献上茶は大正以来、ずっと皇室にしておりますけれども、静岡県がしているわけです。ですから最高のお茶を西から東まで、御殿場まで順番に御献上申し上げている、こういうわけなので、食生活がバランスがとれていることが健康だ。

しかし食っちゃ寝、食っちゃ寝していて、それが健康にいいことはありません。ですから、発言者5さんのように、しっかり取り組んでいるのはグランドゴルフ、それだけではないと思うんですが、なるほどやっぱりスポーツだと。したがって自分でスポーツ用品をつくっておられる。それはもう間違いなくスポーツが大事なことは言うまでもありません。

恐らくグランドゴルフもほかのスポーツと一緒に、仲間と一緒にやるのでしょ。う。という事は孤独じゃないということになります。スポーツだけだとすれば、ジムに通って一人でやるとか、山々を散策するとか、あるいは走るとか、いろんなものがありますけれども、孤独でないということも重要だと思います。

したがって、その健康寿命というものについて初めて提起されて、うちが日本一、まだ男子の方は愛知に負けている。多分私は酒を飲み過ぎているからじゃないかと。なぜかという酒がうまいから、それに尽きるわけです。それでお茶を飲めば養生でうまくいくんですけれども、ともあれ飲み過ぎると体によくないことは言うまでもありません。

ですからスポーツをする、それから孤独にならない、その他いろいろと効能的なプラスの要因があるに違いないので、これをうちの方でも、またいろんな経験をお語りいただいて、なぜ健康寿命が日本一なのか。健康寿命をさらに平均寿命にまで伸ばすにはどうしていったらいいか。なるべく掛川のように、病院がないけれども、病院に行ったら1~2週間でこの世におさらばして、だれにも迷惑かけることがないというような生き方ですね。

そういう「ぴんぴんころりの生き方」というのは、年齢を重ねると考えざるを得ないのでございますので、いかにして健康寿命を伸ばすか。

これを体系的にして、静岡県は数字の上で日本一なので、どうしてかということと一緒にやってみましょう。間違いなく、年齢に応じたスポーツがいに決まっているので、そうした意味でそれに合わせたスポーツ用品をまた開発していただいて、大いに会社の成績を上げていただきたい。これが今まで輸送機器を中心にした産業構造の転換につながると、さらにありがたいと思っております。

さて、海外への進出において、地域の自治体が土地を買う、これはなかなか思い切った提案です。通常こういうことというのは、例えば中国政府がもし静岡県の一面、富士山の麓に土地を買い占めるとなったらえらいことになりますわね。ですから相手にとっても似たようなことがあるかもしれません。しかしながら一方で、例えばついこの間モンゴルのドルノゴビ県に友好協定1周年ということで、小楠議長以下100人近く行ったんです。そしたらその道路を「静岡道路」にすると、メインのところですよ。名前付けちゃって、その近辺を自由に使ってくれと。自由に使ってくれということは、ちゃんと下水をつけてくれ、あるいはきれいな緑を植えてくださいと。それは多分今のところは見返りを期待することは必要ないと思います。

しかし、必ず相手はそれに対するお礼をしなくちゃいけない。石炭をただであげるとか、必ず出てくるんですよ。ですから初めからそれをねらうとだめですけども、しかしながら相手のためにするとなれば、人間ですから、お返ししなくちゃいけないというのが出てくると思います。そしてそのお返しをするときに物がなければこの土地をお使いくださいというふうに出てくる可能性もあります。

ですからまずは、情けは人のためならずということで、そういう関係を静岡県という言ってみれば一地方自治体ですけども、その企業に即してやってみるには、国全体相手にはなかなかできないので、たまたま日本語がよくできる知事さんがいらしたということで、結果的にはそこがいわば石炭を60億トン、運ぶときの結節点になるそういうところが州都になっている。

あるいはクアンニン省というベトナムの省都、そこと交流関係を結ぶ。大体道路をつくってくれとか何とかいう話ばかりだったんです。しかし何と帰りに、向こうの省長さんが、「うちには石炭があります」「どのくらいあるんですか」、よく知らないんです。調べたら36億トン、無煙炭です、全部。そうすると、そこに例えばうちの道路技術を差し上げ

たりすれば、お返しがある。

ですからやはりいきなりこれこれの土地が非常にいいからということは、だれにとってもいい土地に違いないので、そここのところで競争すると、かえって土地の値段が上がったりしかねないということで、余程知恵を出し合って、今海外へタイの、この間スズキ自動車さんがタイにオープンしましたね。そういう自動車会社が今海外、特に東南アジア地域に進出しているのはよく知っています。これはしかし競争ですから、あっという間に事情が変わっていきます。対外関係というのは為替の問題もあるし、それから政治の問題もありますから、そう簡単にストレートな議論が成り立つとは限らない。

したがって、私は静岡県としては今全世界において、特にアジアの地域において、中国のような広大なところは、中央集権というのは無理だとわかっているの、地域間関係を大事にするということが政府の方策になっている。だから浙江省との関係は、中国政府が地方間関係のモデルだと、習近平さんら政府の要人に言っているということが聞こえてきます。そうすると、浙江省政府さんはうちのためにいろいろ便宜を図ってくれるであろうということが予想される。しかし、これは30年のこれまでの積み重ねがあつての上でのことなんです。そういう利益本意だけでいくと、後で大きなつけを支払わされる可能性もあります。

ですから我々は全包围でやっていきますけれども、今おっしゃったように、輸送機器が、向こうの労働力が安い、しかし労働力は中国もそうでありますように上がっていきますから、必ずまた別のところに移る。ミャンマーとか、あるいはさらにこういうことはないかもしれませんが、バングラディシュだとか、そういう人口が多いけれども貧しいところはインフラ整備が進むと、そういう進出というのがあり得るということですので、そうした流れはやがて日本で起こっていることがタイでも起こるであろうということは十分に予想されます。中国では労働工賃がぐっと上がっていますから、中国へ進出しようとする企業が少し少なくなっているというような状況です。

そんなことで私の方もちょっと歯切れが悪くて、申しわけないというふうに思っております。

それから発言者6さんは、御自身がお子様を育てるのに非常に辛い思いをされたということで、しかしそれを克服されて一男三女、6年生から1年生のお嬢さんお二人とお坊ちゃん、それから3歳のお嬢さん、4人を元気に育てていただいて、本当にありがたいと思います。こういうたくさんのお子様を育てる方法が、こういうゼロ歳から小学校6年生

までのお子様と一緒に遊ばせる。一緒に遊ばせるということのメリットが、年齢の高い子と低い子が一緒に遊ばせるという時代が今消えましたね。一人っ子であり、かつ学校では同じ学年と付き合う形で、近所でき大将といろいろな学ぶということがなくなったので、これを自覚的につくっていかざるを得ないということで、これはずっと日本人が自然にやってきたことを今自覚的になさっておられるということですから、これがやっぱり機能するということがわかった。

そしてそこで母親のパワーというものが、こうして280の家族がそろそろものすごいものがある。私は母親の母親、あなたのお母さんの世代ですね、まだ若いのでお母さんも50代ですか。60ですか。私とそんなに変わらないですね。そうすると、その世代というのは、やっぱりものすごい経験を持っています。今はそこまでいっていらっしゃらなくても、そういう本当にお子様を育てていらっしゃる現役のお母様、それから現役を退かれたお母様がいらっしゃるので、それが組むともっと力がつくだろうと思うんです。

たまたま今日の新聞、ごらんになったと思いますけれども、日本の人口が26万人減った。もうかつてない減り様だ。本県も残念ながら減っております。もう今本県の人口は374万人です。この間まで377万と言っていたんですが、380万になろうとしていたんですけれども、今370万になろうとしている。ものすごい勢いで減っています。ですからこれ何とか食い止めなくちゃいけない。

そのためには2人、3人、4人と、産んでいけば産んでいくほど、一見すれば養育費がかかるということは明らかですけれども、しかし産み甲斐があった、育て甲斐があったというふうなそういう制度を一緒にやっつけていかなきゃいけないと思いますね。ですから、どこかのところでは3人目からは保育園までは無料にするとかいうふうなこともあると聞いておりますので、私の方もそういうあなたの御経験を県政の中に取り入れまして、今日は健康福祉部は来てませんか、あつ来ています、ちゃんと来ています。

だから健康福祉部は、実は今年の重点項目は、一つは津波、地産地消、それから内陸フロンティア、それから雇用の創出、そして少子化、これは本当に重要です。でないと本県の活力が失われていく。ですから高齢者の健康寿命を伸ばしていくということと同時に、若い人にバランスのある人口を保たないといけない、これは待ったなしだということで、発言者6さんに期待すると同時に、お母さんパワーというのを、それこそあなたのお母さんの世代までずっと入れた、要するに女性は75まで、本県はですよ、元気なんです。あなたのお母さんのお姉さんのお姉さんぐらいまで、ずっと元気なんですから、これを生かす

方法を考えていただくと、子育てを経験されているから、その方たちにお預けすれば、いろんな意味で安心で、いろんな経験も伝授していただけるんじゃないかというふうに思います。

ともあれ、このポレポレで賞も取られているんですよね。あしたの日本を創る協会の振興奨励賞を受賞されているぐらい立派な活動されていることに敬意を表します。どうもありがとうございました。今後とも頑張ってください。

<発言者2>

先ほど知事から文芸大をもっと活用するといいいよというお話を受けて、そのとき言い忘れたというふうに思ったんですけども、実は毎年いろいろな形で文芸大さんには御協力いただいて、助けていただいております。

具体的には、ステージをつくる時に、PA機器とか、そういったものを触れる普通専門職の方にそちらの方お願いするんですけども、文芸大にはそういったサークルがあるようで、そちらのサークルから学生さんが10名ほど来ていただいて、毎年大きなステージのところにPAのスタッフの補佐という形でお手伝いしていただいております。

それから今年の秋は「やらフェス」を皮切りに6週間音楽のイベントが続くということで、正式名称をちょっと忘れちゃったんですけども、4事業連携という形で「やらフェス」と文芸大さんが主催される「バンバン！ケンバンハーモニカ」さんと、あとその次の週はジャズウィーク、それからピアノ国際コンクールという形で、6週間音楽イベントが続きます。そのときも文芸大さんと一緒にいろいろ会合を開かせていただいたり、どうやってPRしていこうかということと一緒に会を開かせていただいて、「やらフェス」も共同でやらせていただいております。

それから今年もそうなんですけれども「やらフェス」を応援しようということで、自然発生的に生まれた「歌声広場」というのがありまして、それは一応うちの方ではタイアップイベントという形で、一緒に日曜日だけなんですけれども、やらせていただいております。昨年はショパンの歌、アピタの方で2年間やらせていただいたんですけども、10月といってもすごく晴天でお天気がいいと、本当に真夏のような暑い時間の中で高齢者さんが集まって、本当に干乾しのような状態で歌を歌っていたものですから、それからその「歌声広場」もすごく人気がありまして、300人近い高齢者さんが集まるようになってきたものですから、ちょっと木陰のあるところ、残念ながら浜松市のまちなかは木陰がないものです

から、文芸大さんの方にちょっとお願いしたところ、今度講堂を貸していただけるということで、ちょっと高齢者さんにも安心して「歌声」に参加していただけるような形に今準備の方を進めさせてもらってます。

そういう意味で、文芸大さんの方にはいろいろな意味で御協力いただいています。もっと学生さんの力ということで、運営の面にも若い人を入れてやっていかなければいけないとは思いますが、なかなか学生さんというと、就職すると浜松を離れたりとかいう形になるので、こういったイベントに対して継続的に参加していくのがなかなか難しいかもしれませんが、知事がおっしゃっていただいたように、これからも文芸大さんと一緒にやっていきたいと思しますので、よろしく願いいたします。

<発言者2に対する知事のコメント>

あの大学は地域のための大学なんですよ。ですから大いに使ってください。それから文芸大の方は女子学生が多いですけども、静岡大学工学部と情報学部、こことも交流があるんですけども、あそこは男子学生が多い。両方合わせてやってください。そうするとまたカップルが生まれるかもしれないということもあります。

それから音楽は、先ほど小さな子供のことも言われましたけれども、こちらはブラジルの人も多いですね。ですから外国人が多いので、その方たちを巻き込むことができます。インドとの関わりもこれから深くなるでしょう。ですから外国人を上手に入れ込まれて、今サンバで凧祭りのときになさっておられますけれども、上手にそういう国際的な音楽イベントに育てていただければと思います。よろしく願いします。

<傍聴者1>

今日は西区の自治会連合会の会長という立場で参りました。私ども西区は、せっかく今日は湖西市長さんもお見えですけども、浜名湖を抱えております。今、富士山が世界文化遺産、今年とるかと思えます。それから伊豆半島がジオパークですね、日本ジオパーク、次は世界ジオパークを目指しております。静岡空港、世界に開かれた空港になりつつある。

知事が『「美の国」日本をつくる』の著書の中で、山の州、野の州、森の州、海の州、日本は四つの州に分けられるということ「ふじのくに」に置き換えますと、この浜名湖は海の州に相当すると。だから知事がこの浜名湖に対してどのように考えを持っておられるのか。「美の国ふじのくに」をつくるという概念なのか、それを一つお聞きしたいと思いま

す。

もう一つは先ほどこちょっと触れられましたけれども、浜名湖花博が 10 周年を迎えます。2 月議会、6 月議会で 2 回質問が出されていませんで、議会軽視にはならないと思うんですが、もう私のところは花の産地ですし、卸売市場という市場を抱えています。この社長とも話をしたんですが、早く組織を立ち上げて準備をしたい。そのためには 1 カ月なのか 2 カ月なのか 3 カ月なのか、要するに花博 10 周年の期間ですね、これを早く決めて準備をしていきたいと、こういうことを言われていましたので、この 2 点について、せっかくだからお聞きしたいと思います。

<傍聴者 1 に対する知事のコメント>

いい御質問をいただきましてありがとうございます。東部の北側は富士山、これは来年世界文化遺産になります。それから伊豆半島は今年の 9 月には日本ジオパークに認定されるでしょう。1 両年のうちに世界ジオパークになる見込みでございます。そして静岡、これは大井川の北、南アルプスで、非常に生物の多様性に恵まれているということで、あそこが世界エコパークを目指しております。

しからは西はどうするか。西の財産は水ですね、天竜川と浜名湖でございます。ただ天竜川は、諏訪湖から発して 250 キロ伸びている。私は天竜川というものを最初考えたんですけども、いや、やはり浜名湖は静岡県で完結しているということで、浜名湖を世界文化遺産にするということが望ましいと思っております。

なぜか。それは西湖が浙江省の杭州でございます。中国が最も美しいと思っている西湖が、浜名湖を知っている人から見ると、何でこんなものがと、そこまで言うところとちょっとあれなんですけれども、それくらい浜名湖の方が水質はきれいです。あそこは人造湖です。20 年に 1 回は水を全部取り替えなくちゃいけないというようなことです。

ただ上手に宣伝をして、あそこに西湖十景だとか、そしていわゆる喫茶店といいますか茶館をつくって、柳を植えて、そして一切お金を取らない、そういう上手な運営をされることを通して、世界文化遺産として中国の誇るものになっているんですが、素材としては私は浜名湖の方が高い、可能性が高いということです。

そして浜名湖は別名遠江、近江に対して遠江、遠つ近江ということで、この近江に対して、琵琶湖に対して、琵琶湖はちょっと大き過ぎる、こちらは適当にサイクリングできるくらいの大きさであるということで、西湖が世界文化遺産になるのなら浜名湖もなり得る

と、こういうふうに思っております、そのためには近江八景とかございますので、遠江八景をつくる。西湖十景がありますので、浜名湖十景をつくる。

それは向こうのコンセプトを本歌取りにして、そしてそれこそ花博のときにそういうものを発表するというので、日本における最高の文人、芳賀徹先生、県立美術館の館長先生ですが、その先生にお願いをして、浜名湖の文化的格を上げる今いろいろな準備をしております。

ですから環浜名湖、東海道のオアシス、これを東海道のオアシスにふさわしいように格を上げるためにこれからやっていこうということで、先生のおっしゃるように、これは「海の州」といいますか、湖を「うみ」と呼んでも構わないわけですがけれども、そういう「海の州」として水を大切にする、水の景観、これを売り物にするそういう観光資源を推していきたい。

そのための一つとして、今新東名が都田にかかっている橋がございます。これは田中賞をとったすばらしい橋です。都田川は浜名湖に注いでいる。そして一方、東名の方は富士川楽座以外、余りはやらなくなりました。ところが浜名湖SAがあります。浜名湖SAのあそこに船着き場をつくれば、遊覧船で10分で舘山寺温泉。だから駐車場のところに車をとめておいて、ととと下りて、そして船着き場から遊覧船に乗って遊んで、あるいはロープウェイに乗ったりして、楽しんで帰ってこれるとなれば、こういうところはほかに全くなくなります。

浜名湖を売る、舘山寺と一緒に売り込む一つのきっかけになるということで、既に9月3日に前の中日本の会長をされ、今うちの公益法人のセンター長、少しありていに言えばすごい人、横綱審議会の委員をされる方です。この方がそこを視察されます。もうそこに中日本はお金を注ぐことになっていますから、遠からずあそこは船着き場ができて、車と船というのを一緒に楽しめる場所ということになると思いますね。そういうふうにして浜名湖を売り込んでいこうというふうに思っております。

それから花博の開催期間ですね。これは花博10周年というのは、淡路の花博、これの10周年が大変成功したということで、浜名湖の花博も10周年をお祝いしようということで、県と市、一緒になってやりましょう。もちろん西区の自治会の皆様、特にそういう花博にかかわる業者の方々や地域の方々と一緒にしていかなくちやなりません。

それで、とりあえず淡路の花博がどれだけだったのかということがポイントになるんじゃないかと思います。私今改めて言われて、なるほど期間というもの、これはなるべく長

い方がいいのか、半年ぐらいあった方がいいのか、あるいは短期集中的にやった方がいいのか。60日ぐらいというふうになっているようですが、しかし何も淡路花博の10周年にならう必要もない。これはこちらのそれを担う能力にもよりますでしょうし、余り暑いときに、花博も8月にかけてあったときには非常に暑くて、9月になってぐっとお客さんが戻ってきて、500万人を超えたということがございましたので、花の美しい季節、春にするか、秋にするか、どちらかにすると春から夏にかけてでしたか、そういうことを考えておりますが、場合によっては春と秋というのができるかもしれません。ちょっとこれ早急にこちらの方でも市と、また西区の先生とも協議して、一番いい期間に設定するというところでよろしゅうございますか。

<傍聴者2>

先ほど知事がおっしゃっていました防潮堤の話、浜松の方では17.5キロ、募金でできるということですが、湖西はどうなるかというところがまず1点です。私の家は浜名湖の湖面からほんの3メートル程度のところに家がありまして、今地震が来たら、まず地震の衝撃で損壊して、次が液状化で傾いて沈んで、最後に津波で流されてきれいさっぱりということですよ。

沼津のように集団移転ということが本当に可能であるならば、本当はもううちの地区は高齢化がものすごい高いものですから、できるものならそうしていただきたいと思うんですけども、実際現実それは無理だと思って、個人でできることということで、先日静岡にある地震防災センター、あそこでネットで海拔を調べることができるということで、それでうちの湖西市の中を調べました。

理想のところが幾つかあったものですから、4社の不動産を回りまして、そこを調べてみましたら、幾つかヒットしたんですけども、どれもそこは売れないと、一般には売れないと。どうしてかということ、市街化調整区域ということで一般には売れない。どうして個人の努力を行政が邪魔をするんですか。市街化調整区域というもので何かを守るものなんですよね。その詳細はちょっとわからないんですけども、個人の生命とか財産とか守る以上に何かもっと大事なものをそれで守ろうとしているのでしょうか。そこら辺をお聞かせ願いたい。その市街化調整区域というものを外すことができないのかということも教えていただけたらと思います。

<傍聴者2に対する知事のコメント>

どうも、ありがとうございました。あの300億円は浜名湖の今切のところからずっと東の方に17.5キロに使ってくださいというそういう御指定なんですね。ですからさまなければ、本当に300億円というのは大変なお金で、我々がしなくちゃいけないんですけども、そこもしなくちゃいけない。まずそこに使うというのがいただいた方に対する当然の我々の方としてすべき仕事だと思っています。しかし真ん中が高くなって、横が低ければ、津波がぼーんと来れば、両方に水が来ますから、よけいに磐田であるとか、あるいは湖西がやられるというのは大変心配されておまして、この間もその件で来られた方がいます。

そして沼津の、これは沼津全体ではありませんで、内浦の重須というところの方たちが8割の人たちが上に行きたいと。しかしこれも上に行こうというふうにお決めになっても、そこが危険地域だというふうに国が認めないといけないか、それから今度はその地域にもともと重須という内浦のところに自分の家がある。しかし今度はそこに住んではいけない。すさまじい規制があります。今それを交渉しているんですけども、そしてまた傍聴者2さんの方でいろいろ地図を御覧になって、ここがいいと思われたと。その市街化調整区域というのは、緑を大切にするというので、都市の乱開発が進まないようにということで、日本中に適用されているものです。しかし土地があっても、そこに水道が来てますか、ガスが来てますか、電気が来てますか、ですから高ければいいというものじゃないですよ。

そうした中で、例えば焼津の方たちというのが、今1000人近く藤枝の方に動いておられます。先ほど小野田さんの方から、篠原から離れる人がいたときに、それをだれがノーと言えるでしょう。

ですから東日本でも行きやすいように、東日本の高台のところに行きやすいように市街化調整区域というそういう規制を外す。あるいは保安林があるとしますね。その保安林の規制を外す。それからまたそこにインフラ整備をする。そのためには埋蔵品があるかどうかということについて調査しなくちゃいけないという義務があるんです。こういうところも非常に特に新居とかは東海道の枢要なところですから、昔から人が住まわれたり、大事なものがあつたりするので、必ず掘らないといけないんですよ。その掘るのも、あるものが見つかればスコップで掘るといって、考えてみると気の遠くなるようなことをしなくちゃならない。しかしそれももっと簡略に済ませて、そして人の命を大事にするためにそこに移れるようにするというこのために、東日本大震災の復興のために30以上のいわゆる復興特区制度をつけたんです。

子どもはそれがあなたがおっしゃったように、いつやられるかわからないから、そのやられる前にその特区をうちにくれと言って今交渉しているんです。22 くらい取れそうなんです。それを今中央政府と交渉しているんです。ですからあなたの苦労は私たちの苦労でもあるんです。一人の個人を守る、あるいは 370 万人のうち、沿岸地域に住まわれているたくさんの方たちを安全にするためにはどうすればいいかということと一緒に考えています。

ただ、今たまたま 4 つ見つけれられたところがうまくいかなかったということのようですが、似たような方たちがいらっしゃるに違いないので、そのところを、市街化調整区域が外れる可能性もないわけではありません。ですから私はちょっと個別的なことはすぐに答えることはできませんけれども、やはり日本というのは山があり、そしてきれいな水が流れて、田畑にして、そして工場地域や生活地域があります。それがだれもが勝手にどこでもいいから開発するということになると、景観が乱れますし、水も畑にいかなくなったりします。ですから変な工場が建たないようにとか、いろいろなことでとりあえずここは市街化を一気に進めないようにということで線引きがされている。

これは決して人の命を犠牲にするというんじゃなくて、全体として人の生活を守るためにある法律で、しかしあなたの言われるように、これは人のためにある法律ですから、運用によって変えることができるし、今復興総合特区という東日本でやっているのは、まさにそのためにそういう今までの規制を全部取っ払って、それで進めるようにしたいとおっしゃっている。

ところがもう 1 年以上たつのに上に移らない。なぜか、道路もない、あるいは学校もない、職場もない、ショッピングセンターもない、福祉施設もない、ないないづくしで、上に行ったら安全ですけども、ないないづくしだから移れないんです。だから移るためにはいろいろなものが必要です。そうしたものをよくお考えになって、高台だけではなくて、本当に安全なところはどこかということも考える必要がある。

ただ差し当たって、今すぐに 10 メートル以上の防潮堤をつくることはできませんけれども、しかしそれを今考えていますから。しかしこれは 1000 年に 1 度来るやつだと。そして確かにこちらは今切のときにはばあっと来ています。液状化も袋井で起こりました。そうしたことがございますので、御心配の向きは当然だと思いますけれども、実はみんなでそれを考えているということもお忘れにならないようお願いしたいと思います。